

61 江戸時代のおしゃれ (2021年6月1日)

パリ日本文化会館において7月10日まで開催中の「美の秘密 - 浮世絵に見る江戸時代の化粧と髪型」展 (<https://www.mcjp.fr/ja/agenda/secrets-de-beaute-jp>) では、化粧をする女性を描いた浮世絵や江戸時代の女性が使っていた化粧道具が展示されています (<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100158237.pdf>)。展示されている浮世絵に描かれている女性たちをよく見ると、髪型が少しずつ違うことが分かります。



« Le Gynésée de Chiyoda: La coiffeur » par YC|SHU Chikanobu
楊洲周延「千代田之大奥 お櫛あげ」

日本では古くから「髪は女の命」と言われ、長く艶やかな髪が美人の条件とされてきました。古代の貴族の女性は長い髪を垂らしていましたが、16世紀末頃から髪を結うようになり、17世紀に入って江戸時代になると髪型の種類が増えていきました。日本髪の種類は数百を数え、身分や職業、既婚か未婚かによって髪型が異なり、地方独特の髪型も生まれました。髪型は、おしゃれを楽しむだけではなく、その人の立場を表す目印ともなりました。また、江戸時代後期の1813年には、美容の本「都風俗化粧伝」(みやこふうぞくけわいでん)が出版され、女性たちは熱心におしゃれを研究しました。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

さらに、金や銀、べっ甲や象牙を材料として美しく細工が施された櫛、簪（かんざし）、笄（こうがい）といった小物で髪を飾るようになりました。櫛は、本来は髪をとかすためのものですが、着物や帯が華やかさを増したのに合わせて、様々な模様をついた髪飾りになりました。ヨーロッパの貴族の女性も髪をアップにして、カールをしたり、リボンで飾られた華やかなヘアスタイルをしていましたので、髪でおしゃれを楽しみたいと考えるのは世界共通だと言えるでしょう。

現代の日本の日常生活では、江戸時代のような日本髪をしたり、櫛などをヘアアクセサリーとして使うことはありませんが、髪をとかすために櫛を使う人はいます。櫛は、小さくて軽いので、化粧ポーチに入れて持ち運ぶのに便利です。髪を美しく整えていたいと願う女性の気持ちは、いつの時代も変わることはありません。

